『脂肪の塊』におけるアルコールの儀式的機能

北　川　美　香

はじめに

モーパッサンが一躍脚光を浴びることになった『脂肪の塊』で，作家は社会階層や職業の異なる10名の人間が織りなすドラマを見事に展開している。この特異な状況を不自然に見せず，かつ効果を上げるため，非常に巧妙な舞台設定が用意される。まず，乗合馬車という狭い空間いわば密室に長時間閉じこめられ，普段なら隣合わせることのない人々が膝突き合わせざるを得なくなっている。一行がプロシア将校に足止めを食うことになる宿屋も次なる密閉空間を作り出す。それのみならず，周りには雪がしんしんと降り積もって，閉ざされた領域から逃げ出すことも容易ではない。こういった物理的要因に加えて，プロシア軍に生殺与奪権を握られ，監視・包囲されている切羽詰まった状況が空間の密閉性を高めている。普仏戦争という非常事態のもとで何の共通点も持たない人々が運命をともにすることを余儀なくされる。

そのうえ，各登場人物に担わされた役割及び人物間の相互関係が物語の進行とともに劇的に変化することも見逃せない。これは作中人物の機能を批評家が平面的に解析しがちなモーパッサンの長編処女作『女の一生』との差異を生み出している[1)]。変化の様子が食物の授受と深く結びついている点はこれまでに指摘されてきた[2)]。

モーパッサンは実生活の身近な事物を通して人間の本質を鋭く捉えて分析している。食欲は人間の根源的な欲望であるが故に，持ち主の人間性をあからさまに示すもっともてっとり早い手段になるためだ。食行為の移り変わりを見ることは，そのまま登場人物間の関係の変遷を辿ることに他ならない。作品内では飲み食いすることに喜びと苦悩が絶えず交錯して映し出される。従来の研究は食事の中でも食品のみに関心が偏っており，飲料に関する記述を見つけることはできない。が，飲むことは食べることより重大な行為とみなされるという。飲むことによってあるものの固有の生，あるいは精（エッセンス）が直接的に体内に取り込まれるからである[3)]。本論では，今まで光をあてられなかった共有される飲み物――ワイン――に焦点を合わせる。アルコールは嗜好品の一種で，生き延びるのに必要な飲食物とは呼べない。生命を維持するという食品の第一義的な目的よりも社会的ないしは象徴的意味が強い。なかでも，発酵飲料として長い歴史と多様

な風味を誇るワインには数々の神話的・文化的イメージが結びつき，登場人物の行動に二次的な意味を与え，重層化している。しかしそればかりでなく，食文化は一方で食べ物の物質的な側面を指すが，もう一方で一人あるいは複数で食べる食事作法としての社会的・文化的な意味をも含んでいる[4]ため，ワインを大勢で飲む作法自体にも複数の役割が負わせられる。「飲む」行為の中で人々が交際し，心を通わせ，人生をも賭ける。そこには様々な習慣，風俗，行為規範，思考形式が反映されてくる。我々は以前食品の物質的な面を中心にヒロインのありようを分析した[5]が，ここではワインの儀式的機能をも踏まえて，モノを媒介として人間と人間が結ぶ関係を見てゆきたい。

第1章　聖なる酒ワイン

普仏戦争末期，迫りくるプロシア軍から逃れようとルーアンを発ってディエップに向かう馬車には，伯爵夫妻，大ブルジョワ夫妻，ワイン卸商人夫妻，修道女2名，革命家，娼婦が同乗している。予想以上に道行きが困難で，昼食を用意しなかった一同は空腹に悩まされるが，娼婦の携帯した食料を分け与えてもらう。この時売春婦が周囲のものに気前よく食べ物をあげたことは，彼女が一行の犠牲となる結末を予感させるものであると通常は解釈されている。しかし，娼婦エリザベットの犠牲的精神を最も象徴的に表すものは他にあるのではないか。

空腹に苦しむ一行の前にまず現れる食料品はラム酒である。革命家が携帯していたラム酒を皆に勧めるが，ワイン卸商のロワゾーが2口飲んだだけで，すでに空腹であるにもかかわらず他の連中からはあっさり断わられる（« Cependant Cornudet avait une gourde pleine de rhum; il en offrit : on refusa froidement. » (p.93)）。極限状況にあっても，そしていくら全員に行き渡るほど十分にあっても，革命家の提供するようなラム酒には手を出せないという訳だ。それに反して娼婦の持ち物であるワインは簡単に受け入れられる。ワインが特別な意味あいを持たされているのはラム酒との対比により明確だ。最初に娼婦が食品を取り出す場面でボルドー酒は誇らしげに娼婦の食料かごから顔をのぞかせている（« Quatre goulots de bouteilles passaient entre les paquets de nourriture. » (p.94)）。

そもそも，体内に入れることで酔いが生じるため，アルコールは人間にとって大きな刺激物であり，欲望の対象である[6]。ワインは，ギリシア人にとって解放と陶酔をもたらすもの[7]とみなされ，古代ローマ人のバッカス信仰へとつながり，破廉恥な行為の許される非日常の世界へ導く飲み物というイメージが強かった。バッカスの描かれている絵はどれもワインの神が真っ赤な顔で陽気に騒ぎ羽目をはずしているといったものだ。そのため，しばしばワインは人間の愚かしさや欲望といった負性の本性と結びついて考えられてきた[8]。モーパッサンの作品を見てもワインがマイナスの価値を負わされている例は少なくない。祝いの席で珍しくワインを飲んだことが引き金となって，美徳の人イシドールはアルコール依存症患者に転落してしまう（『ユッソン夫人の薔薇の木』）。また，『私の妻』では，結婚式の披露宴でワインとリンゴ酒（シードル）を飲ん

で酔っぱらった男が，未婚の女性の部屋に間違えて入ったばかりに心ならずもその女と結婚する事態に陥る。これらの使用法は，古代ギリシャからのワインの役割——無礼講を作り出す原動力——を引き継いでいる。

ところが，キリスト教の出現とともにワインにはもう一つの面——神の前に敬虔な祈りを捧げる飲み物としての側面——が付加される。キリスト教とワインの結びつきは深い。聖書によれば，初めてブドウを栽培しワインを口にしたのはノアであるという[9]。さらに，イエスが最初にカナの地で行った「奇跡」は結婚の祝いの席に必要なワインが足りないのを補ったことだ[10]。特に重要なのは，いわゆる「最後の晩餐」でイエスが「皆この杯から飲め。これは罪の許しを得させるようにと，多くの人のために流す私の契約の血である[11]」と言って弟子たちに杯のワインを勧めた点にある。ワインはキリストの血に変化してワインを飲む者に霊力，生命力を授け，キリスト自らが犠牲になったことを思い出させる。すなわち，ワインは供犠に捧げられた犠牲者の血とみなされ，ワインと血は，象徴として互換性を持つ。キリストの血として神聖な意味づけがあるからこそ，カトリック教会ではミサや聖体の秘跡の中でキリストの犠牲を再現し，ワインを受け取る者の肉体に聖性を吹き込むと考えられる。これにより信者はキリストの血に一体化する[12]。

『脂肪の塊』では，娼婦のコップでワインを皆がまわし飲みする。

> Un embarras se produisit lorsqu'on eut débouché la première bouteille de bordeaux : il n'y avait qu'une timbale. On se la passa après l'avoir essuyée. Cornudet seul, par galanterie sans doute, posa ses lèvres à la place humide encore des lèvres de sa voisine. (p.95)

娼婦の持ち物を共有するということでほんの少しは躊躇が見られるものの，結局は全員で一つの杯を使っている。ワインをまわし飲みしている点，ミサで用いられる聖杯と同じく金属製の杯(timbale) が使われている点から，ミサでの聖体の秘跡の典礼が連想される。

飲む者の体力を回復させるのには，ワインの聖性以外にその医薬的効果も一役買っている。呪術的世界では液体は血の象徴であり[13]，またワインはバッカス信仰でもその血を表した[14]。それにキリスト教の思想が加わって，ワイン（特に赤）は血液のもとと考えられた。ジョルジュ・サンドは「ブドウの聖なる血であるワインは，我々の血管を流れるものの兄弟に他ならない」と述べている。ワイン療法に対する信仰は，ギリシア・ローマ時代以前からあったが，時代が下るとともにその科学性が医学で承認される。発熱，頭痛，はては伝染病の治療にまで有効と言われた[15]。19世紀には医師でさえワインは貧血の治療に効果があると主張していた[16]。医師は，血液が生命の神秘と病理をつかさどるとみなし，病人に動物の動脈から流れ出たばかりの鮮血を飲むよう勧めた。血の中に若さと力の蘇生を求めたからである[17]。デュマも『大料理事典』の中で「血液」という項目を設け，動物の血はきわめて栄養分に富み，活力を与えてくれる食品であると，血を活力と結びつけている[18]。

『脂肪の塊』において，聖別されたワインを分配するキリスト教徒の姿と活力を与える血のイ

メージは次の場面でさらに増幅される。

> Alors, entourés de gens qui mangeaient, suffoqués par les émanations des nourritures, le comte et la comtesse de Bréville, ainsi que M. et Mme Carré-Lamadon souffrirent ce supplice odieux qui a gardé le nom de Tantale. Tout d'un coup la jeune femme du manufacturier poussa un soupir qui fit retourner les têtes; elle était aussi blanche que la neige du dehors; ses yeux se fermèrent, son front tomba : elle avait perdu connaissance. Son mari, affolé, implorait le secours de tout le monde. Chacun perdait l'esprit, quand la plus âgée des bonnes sœurs, soutenant la tête de la malade, glissa entre ses lèvres la timbale de Boule de suif et lui fit avaler quelques gouttes de vin. La jolie dame remua, ouvrit les yeux, sourit, et déclara d'une voix mourante qu'elle se sentait fort bien maintenant. Mais, afin que cela ne se renouvelât plus, la religieuse la contraignit à boire un plein verre de bordeaux, et elle ajouta : « C'est la faim, pas autre chose. » (p.95)

当初ロワゾー夫妻や修道女らが娼婦の食料を食べ漁っていても，大ブルジョワ夫人は貴族夫婦と同じく，娼婦風情に食べ物を恵んでもらうのは恥ずかしいとしばらく我慢している。が，ついに上の引用にあるように空腹の余り気を失ってしまう。これを見た修道女がコップにワインを入れて夫人に飲ませる場面は，ワインを飲ませたことに加え，修道女がミサ執行司祭の代わりに介添え役を演じることもあって，宗教儀式を連想させる。夫人は，聖体のワインによりキリストの命の賜にあずかるように，あるいは娼婦の血液を注入され，そのエネルギーを吸収したかのように顔色を取り戻す。ワインを介して身分の全く異なる二人の女が結びつき，娼婦は自らの血を苦しむ者に分け与える救い主の地位に上昇する。ワインはキリストの自己犠牲，いけにえの象徴であることから，娼婦が人身御供となる運命を暗示している。人間を救うためイエスが贖罪のいけにえとなって自分自身を捧げた姿と重なり合ってくる。自分の罪を知る取税人や娼婦が先だって天国に入れるというキリスト教の原点に帰るものとも読める。一言で言えば，ワインは娼婦の聖性と生命力を表す指標として働いている。

さらに，ブルジョワ女性が娼婦と対峙させられているのは注目に値する。なぜなら，同じブルジョワといってもその保守性は夫と妻で当時相当のひらきがあったからである。革命後の自由主義・科学主義を信奉する男性達と違い，ブルジョワ女性は階級固定を指向する傾向があった。19世紀の産業革命以降，女性の生活の生産的側面は消滅し，家庭生活つまり生殖に注がれるエネルギーが増したという。生殖を通していやが応にも自然とつながらざるを得なかった女性が自然の猛威を抑制できるのは秩序のみによったとボニー・スミスは解説している[19]。婚姻という性的結合の聖化によって動物性との離反を図った彼女らにとって，獣的な官能性を体現すると当時一般にみなされていた娼婦は許しがたい存在であった。強制的であれ，自ら好んでであれ，様々な規範からはみだした娼婦[20]は，階層秩序の固定化に腐心したブルジョワ女性を恐れさせた。

『脂肪の塊』で，登場人物の娼婦に対する態度を見れば，性別によって歴然とした差がつけられている。例を挙げれば，ロワゾーは娼婦と乗り合わせていることが分かるとさも嬉しそうに（« émoustillé » (p.91)）女の様子を窺い，気軽に声をかけている。一番最初に彼女の弁当に手をつけるのもこの男である。一方，妻の方は夫に勧められてもなかなか女の食料に手を出そうとしない（« Loiseau, dans son coin, travaillait dur, et, à voix basse, il engageait sa femme à l'imiter. Elle résista longtemps, puis, après une crispation qui lui parcourut les entrailles, elle céda. » (p.94)）。そしてたびたび嫌悪感を露にする。馬車に有名な娼婦がいると気づいた時，貴族とブルジョワの３人の既婚夫人は娼婦に対抗して団結する。

> Mais bientôt la conversation reprit entre les trois dames que la présence de cette fille avait rendues subitement amies, presque intimes. Elles devaient faire, leur semblait-il, comme un faisceau de leurs dignités d'épouses en face de cette vendue sans vergogne; car l'amour légal le prend toujours de haut avec son libre confrère. (pp.91-92)

« dignités d'épouses » と « vendue sans vergogne », « l'amour légal » と « l'amour libre » がそれぞれ対置され，夫人らはいずれも前者を優位とみなしている。「生殖のための性」と「金で買われる官能的な性」を分離し，優劣をつけている訳だ。

卒倒する夫人と娼婦の肉体的特徴もシンメトリーをなす。ブルジョワ夫人は痛々しいほど華奢で可憐（« toute petite, toute mignonne, toute jolie, pelotonnée dans ses fourrures » (p.89)）に描かれ，倒れる場面では貧血のためか顔色が雪のように白くなる。貧弱で生殖力に乏しい印象を与える。単なる印象にとどまらない証拠に，彼女に子供がいるとの記述は全く見られない。それに対し，娼婦は豊満な胸と腰を有し，年齢の割に肉体が成熟しており，血色も良い。その姿は，子供を抱いて乳を飲ます母親像を連想させ，実際この娼婦は１児の母でもある。彼女は本来なら19世紀ブルジョワ女性に課せられた母性，生産性[21]の具現となる。それも単なる母ではない。娼婦は，革命家に対してもプロシア人に対しても貞操を守ろうと抵抗し，一行が缶詰になっていた宿屋の近くで子供の洗礼式があると知って，一人で駆けつける。対照的に，女が不在の間，貴族とブルジョワ連中は娼婦をいかにしてプロシア将校の犠牲にするかを話し合い，きわどい冗談やわいせつな言葉を楽しんでいる。つまり，比較によって一時的とはいえ，娼婦は母性に加えて神聖さと処女性を強調され，聖母マリアのイメージさえ付与されている。

ワインの授受は，作品のメインテーマである価値の逆転を様々な位相で実現している。道徳的汚物と軽蔑されていた娼婦に，聖性と生命力が吹き込まれ，ブルジョワ女性の特権であった母親役まで引き受けさせる。ブルジョワ社会から排除，阻害される娼婦が一種の英雄に転化しているのが読み取れる。

第2章　官能の酒シャンパン

『脂肪の塊』には多人数で酒を飲むシーンがもう1箇所ある。数々の説得工作が功を奏し，娼婦がプロシア将校のもとに行ってくれたため，出発できるのを祝って階下ではシャンパンの酒盛りが始まる。一般的にシャンパンは19世紀半ばまでそれほど人気のある代物ではなかったが，スノビスム，ダンディスムと結びつき[22]，消費を誇示するための贅沢品として人の心を捉えるようになった。このシーンではシャンパンの与える2つのイメージがうまく利用されている。

第1にその高級さが，非日常的空間を作り出している。シャンパンは発泡性にするために2度発酵が行われる。瓶内発酵は手間と費用のかかる製法である。瓶内での再発酵にほとんどのメーカーは2年から3年かける。そのうえ，ドサージュをしてからも最低数カ月から1年くらいは寝かせた後で出荷する。従って，ブドウを収穫してから大体3～4年以上たたないと商品にならず，こうしたストックのための経費は馬鹿にならない。普通のワインよりも割高になるのも無理はない。また，1836年にフランソワ比重計が発明されるまで瓶内で発生する二酸化炭素の量を測定する術がなかったため，2度目の発酵中に瓶が割れることも多く，一説では破裂率が80％に達することもあったという。これが価格を押し上げる要因ともなった。それで，誕生以来，フランスをはじめ，ロシアでもプロシアでも，王宮で高級酒としてもてはやされ，宴会に欠かせなかった[23]。飲むことがプレスティージュのシンボルだったのだ[24]。その高価さに加えて，立ち上った泡が儚く消えてゆく性質故，場の雰囲気を盛り上げるのに最適であると考えられた。『脂肪の塊』の直前に執筆された『ナナ』でも，作者ゾラは高級娼婦にシャンパンを頻繁に飲ませている。ろくに食事も取らぬ女の生活の刹那性が如実に現れている[25]。『脂肪の塊』では，娼婦がプロシア将校の要求を受け入れた嬉しさにロワゾーが宿屋の主人に注文する。

> Loiseau cria : « Saperlipopette! je paye du champagne si l'on en trouve dans l'établissement »; et Mme Loiseau eut une angoisse lorsque le patron revint avec quatre bouteilles aux mains. (p.115)

節約家の夫人の心配はシャンパンの値段が法外なことを物語っている。普段，宿屋の食事中には，基本的にワインが注文され，修道女とロワゾー夫妻は倹約のためにリンゴ酒を飲んでいる。つまり，ワインは日常的な飲み物，リンゴ酒はより経済性が高く，ノルマンディーの特産であることからその地域性を表す飲み物になっている。この点は，モーパッサンの他の小説でも確認される[26]。リンゴ酒が農民の生活に根付いた日用品であるのと比べれば，シャンパンはあくまでも特別な慶事にしか使われない贅沢品である。一同は，娼婦の犠牲を祝っているのである。

もう一つの特性とは，ラヴァアフェアとの緊密な関係である。キリスト教と結びついて聖なる意味を付加される以前のバッカス崇拝と直結しているのだろう。『シャンパンの歴史』の中で著者はシャンパンが口説き酒として乱用されてきた歴史に1項目もうけ数頁を割いている[27]。18世

紀の摂政時代からすでにシャンパンで情欲を誘発する術がパレ・ロワイヤルで盛んに用いられる[28]。19世紀後半の現象として，一種の催淫剤的なシャンパン偏愛が広まった。第二帝政時代には高級娼婦達の渇きを癒すことになる。シャンパンを飲む楽しみのほとんどは娼婦に泡をふりかけることで，特に年とった宮廷人は，泡が噴出することに性的な意味を見いだした[29]。シャンパンの最盛期は，色事の最盛期とも言われる[30]。シャンパンは発泡性のため，普通のワインより炭酸ガスが胃壁を刺激してアルコール分の吸収率が早く，多いので酔いやすいとされる[31]ことも一つの要因かもしれない。だが実際は生理学的な根拠より文化的に条件づけられていると思われる。また，ポンパドゥール夫人が「女性が飲んでその美しさを失わない酒はシャンパンだけです」と主張し，宮廷の自分の宴席でボルドー・ワインとシャンパンしか出さなかった[32]ように女性に好まれた点も人気を促した。

モーパッサンの作品でも恋愛感情を高めるためにシャンパンが絶妙の小道具としてしばしば威力を発揮する。例えば，『ベラミ』の中で，ド・マレル夫人は「今夜は徹底的に酔って騒ぎたい」という時に一番上等で口当りの良い冷えたシャンパンを注文する[33]。シャンパンが身体に染み渡るのと，愛の思いが心に芽生えてくるのが平行して捉えられることもある[34]。夫の陰謀で警官に踏み込まれた愛人達の部屋には夕食の残骸が放置されていた。シャンパンの空瓶やカキの殻が情事の後を物語る[35]。短編群に目を転じても，クリスマスの夜に女を連れ込んで晩餐としゃれこんだ男はやはりカキとシャンパンを欠かさない。シャンパンの杯を重ねてほんのり紅潮した女に男は魅了される（『クリスマスの夜』）。女はシャンパンの泡のように儚い何も残さない存在であるとする『出会い』。倦怠期の夫婦の興奮を呼び覚ますためにも使われる（『軽はずみ』）。女が酔う酒はシャンパンしかないともされる（『叫び声』）。シャンパンが男女の将来的な結びつきを暗示することもある（『遺産』）。他にもシャンパンが抜かれたのを契機に緊張した空気がほぐれ，男女の会話が成立する『ラテン語の質問』など枚挙に暇がない。『脂肪の塊』と同時期に執筆され，同じく娼婦を中心人物とする『テリエ館』でも，最後のシーンでシャンパンの大盤振舞いによる乱痴気騒ぎが巻き起こる。シャンパンはダンスとセックスを交互に繰り広げるお祭りを演出する。

『脂肪の塊』に戻ると，シャンパンが酌み交わされるのをきっかけに，皆気が浮き立ってきて，大ブルジョワのカレ・ラマドン夫人と伯爵，伯爵夫人とカレ・ラマドン氏の仲が怪しくなり，座はますます乱れる。女性達の羞恥心は表面的なものに過ぎず，一皮めくればいかがわしい情事に心踊らせる心情がありありと窺える。当時，女性の中で最もシャンパンに結びつけて考えられることの多かった娼婦がこの酒を口にせず，堅気の連中が浮かれているのは逆説的である。

> Au dessert, les femmes elles-mêmes firent des allusions spirituelles et discrètes. Les regards luisaient; on avait bu beaucoup. Le comte, qui conservait même en ses écarts sa grande apparence de gravité, trouva une comparaison fort goûtée sur la fin des hivernages au pôle et la joie des naufragés qui voient s'ouvrir une route vers le sud. (p.116)

その夜，シャンパンのせいで皆寝つかれなくなる。

> Et toute la nuit, dans l'obscurité du corridor coururent comme des frémissements, des bruits légers, à peine sensibles, pareils à des souffles, des effleurements de pieds nus, d'imperceptibles craquements. Et l'on ne dormit que très tard, assurément, car des filets de lumière glissèrent longtemps sous les portes. Le champagne a de ces effets-là; il trouble, dit-on, le sommeil. (p.117)

闇の中で何が繰り広げられたかは明記されていないがシャンパンに火をつけられた欲望はそう簡単におさまらなかったようだ。

この作品でのシャンパンの使われ方の独自性は，共犯的連帯関係を映し出している点である。それは，飲酒儀式が共同体の儀式であることを踏まえている。互いに味方であることを確認しあい，互いに信用できるかどうかをチェックしあうために集団で飲むのである[36)]。集団飲酒のチェック機能を最もよく表す形式が乾杯と言える。『脂肪の塊』ではロワゾーの音頭で全員が起立して乾杯する。

> Loiseau, lancé, se leva, un verre de champagne à la main : « Je bois à notre délivrance! » Tout le monde fut debout; on l'acclamait. (p.116)

乾杯は古代に神または死者のために神酒を飲んだ宗教的儀式が起源と見られ，キリスト教の時代になって，キリスト・聖母・聖人に乾杯する風習ができる。ここでも人々は娼婦の自己犠牲を祝して杯を掲げており，娼婦の聖母との同一性が窺われる。また，昔は客に酒を勧める時，毒の入っていないことを証明するため，客の杯と同時に主人の杯にも酒を注いで主客が同時に杯を取って飲んだり，お互いの杯につがれた酒を混ぜ合わせたりする習慣があった。すなわち乾杯は相互の友情と好意と善意を確かめ合い，共同意識を結ぶのである。

そう考えればこの祝宴に修道女が仲間入りしているのも当然とうなずける。

> Les deux bonnes sœurs, elles-mêmes, sollicitées par ces dames, consentirent à tremper leurs lèvres dans ce vin mousseux dont elles n'avaient jamais goûté. Elles déclarèrent que cela ressemblait à la limonade gazeuse, mais que c'était plus fin cependant. (p.116)

彼女らが，生まれて初めて禁断の酒を口にしたことは，共犯者へと成り下がった事実を意味する。宗教者としての節操を踏み外した誘惑の滴をレモンサイダーより美味だとはっきり表現している。口数の少ない修道女らが，実は他の御夫人達と同様，娼婦を利用するだけ利用して後は捨ててしまう非情さが飲食行為に如実に現れている[37)]。そして，娼婦を丸め込むのに唯一手を貸さなかった革命家は部屋の隅で一人，身動きもせずこの祝宴を冷やかな眼差しでながめている。そして最

後に一同の卑劣さを罵倒する言葉を吐いてその場を立ち去る（« Je vous dis à tous que vous venez de faire une infamie! » (p.116)）。

同じく愛国的な娼婦を登場させたモーパッサンの短編『フィフィ嬢』でも乾杯は非常に重要な役割を果たす。プロシアの将校らはフランス人の娼婦を招き，シャンパンを抜いて乾杯を繰り返す。ある将校が « A nos victoires sur la France! » (p.394) と杯を上げて叫んだところ，それまで完全に酔って倒れそうになっていた娼婦らが急に我にかえる。« A nous la France et les Français, les bois, les champs et les maisons de France! » や « Vive la Prusse! » などという乾杯が続き，ついに一人の娼婦が将校の喉に果物ナイフを突き立てる。彼女達は，職業上の必要性からプロシア軍人とどんちゃん騒ぎを繰り広げても，共犯になって祖国を罵倒することはできなかったのである。

さて，『脂肪の塊』の一同は娼婦が身を犠牲にしている階上＝「上」を見上げながら，下品な会話で盛り上がる。本来社会的地位が上のはずの者達が，「下」から娼婦を見上げているわけで，道徳性の逆転現象が空間面に象徴的に現れている。『テリエ館』でシャンパンを酌み交わすのが娼婦とその客であるのに対し，ここでは少なくとも表面的には官能性を否定するはずの貴族・ブルジョワ・修道女になっているためにメッセージは強烈である。シャンパンは，生殖のための性/官能的な性，宗教家/堕落した女，母性/官能性，快楽/禁欲といった二項対立を逆転させている。

終わりに

酒を飲むことは，昔から共同体の形成を意味した。『脂肪の塊』で，ワインは，位階性システムからの解放を意味し，グループ内部の結束を生み出した。ワインの新旧対照的な2通りの飲み方は，異なる方向から当時の固定化された階層秩序の逆転を鮮やかに描き出している。つまり，娼婦が分け与えたボルドー・ワインは神聖な儀式を通じて娼婦の位置を高め，シャンパンは猥雑で歓楽的な要素を持った宴で，近代市民社会が掲げた良識というものの危うい虚構性を暴いている。小説の最後の場面になって，硬直した階級システム，抑圧的な体制秩序が息を吹きかえすものの，冒頭部とは異なって貴族やブルジョワ連中を「主義」や「宗教」を持ち合わせた « honnêtes gens » (p.90) とは思えない。我々読者はその仮面に隠された素顔を知っている。

また，今までの研究で作中人物間の役割交換は，娼婦とそれ以外の登場人物というように大ざっぱに捉えられてきたが，ワインの飲酒儀式によって露にされる対立・拮抗したイメージ——聖俗，母性と不妊性，生殖のための性と官能のための性——は，女性に関するものが圧倒的に多く，結局書き手を含めてその時代の男達に広く一般的だった1つの典型的なイデオロギー——娼婦はエロスの体現者——を転覆させていると分かる。母性的女性対娼婦的女性というはなはだ男性本位の女性の2分法を破壊し，両者の境界線が曖昧になっている。良妻賢母のブルジョワ女性の欺満性を暴いた点で，同時期の娼婦を扱った他の作家あるいはモーパッサンの作品とは一線を画する。ゾラはナナにシャンパンを欠かせないものにし，舞台の楽屋や自宅で浴びるように飲ませる。ゴ

ンクールは，エリザによく働いた褒美としてスープの代わりにワインを飲む特権を与える。また娼婦全体に関して火酒の消費し過ぎを描いている[38]。ユイスマンスはマルトに死ぬほど痛飲させ，アルコールに漬かった生活を用意する[39]。すなわちこれらの作品でアルコールは娼婦の自堕落な性格や放埒な生活態度を象徴する。いわば当時のステレオタイプの娼婦像を描くために使われている。『脂肪の塊』は以上の作品あるいは『テリエ館』と同種類に論じられることが多いが，共同飲酒の果たす役割を見てもその特異性は明らかである。

註

本論中の『脂肪の塊』からの引用はすべて Guy de Maupassant, *Contes et nouvelles I*, Louis Forestier éd., Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1974 による。

1) Paul Jacopin, Marta Dvorak, « Le personnage féminin comme support idéologique » in *« Une vie » de Guy de Maupassant et le Pessimisme*, Marketing, 1979, pp.296-326. Naomi Schor, *Breaking the chain : women, theory, and french realist fiction*, NY, Columbia University Press, 1985, pp.48-77 等.
2) Marie-Claire Bancquart, *Boule de suif et autres contes normands*, Garnier, 1971, XXXIV. Pierre Danger, « La Transgression dans l'œuvre de Maupassant » in *Maupassant et l'écriture*, sous la direction de Louis Forestier, Nathan, 1993, p.157. Mary Donaldson-Evans, « The Decline and fall of Elisabeth Rousset : text and context in Maupassant's *Boule de suif* » in *Australian Journal of French studies*, vol. XVIII, no 1, 1981, p.18. ——, *A Woman's Revenge*, Lexington, French Forum, 1986, p.44.
3) W. シヴェルブシュ，『楽園・知覚・理性』，法政大学出版，1988, p.178.
4) 中川久定，「18世紀フランスの食文化」，『食と文学』，中山時子・石毛直道編，フーディアム・コミュニケーション，1992, p.44.
5) 北川美香，「『脂肪の塊』における食のテーマ——娼婦エリザベットを通して——」，『仏文研究』，27号，1996, pp.163-174 参照。
6) 河野友美，『食文化と嗜好』，光琳社，1991, pp.119-120.
7) ヒュー・ジョンソン，『ワイン物語』，日本放送出版協会，1990, 上巻 p.138.
8) 倉持不三也，『ワインの民族誌』，筑摩書房，1988, p.37.
9) 「創世記，第 9 章第20～21節」，『聖書』，日本聖書協会，1977, p.10.
10) 「ヨハネによる福音書，第 2 章第 1 ～11節」，同書，p.137.
11) 「マタイによる福音書，第26章第26～29節」，同書，p.44.
12) 高柳俊一監修，『聖書文化辞典』，本の友社，1996, p.151, 246. ジャック・アタリによると，この聖体の秘跡にはカニバリスムを認めないわけにはいかないという（『カニバリスムの秩序』，みすず書房，1984, p.56）。その観点に立てば，娼婦が馬車の同乗者に「食い物にされる」様子がよりいっそう明確に浮かび上がる。
13) 『楽園・知覚・理性』，前掲書，p.178.
14) 『ワイン物語』，前掲書，上巻 p.162.
15) 『ワインの民族誌』，前掲書，pp.188-189.
16) 北山晴一，『美食と革命』，三省堂，1985, p.190.

17) 小倉孝誠,『19世紀フランス夢と想像』, 人文書院, 1995, p.264.
18) 『大料理事典』, 岩波書店, 1993, p.220.
19) ボニー・G・スミス,『有閑階級の女性たち.フランスブルジョア女性の心象世界』, 法政大学出版, 1994, p.55, 95, 140.
20) ロール・アドレル,『パリと娼婦たち 1830-1930』, 河出書房, 1992, p.14. 娼婦を差別し, 社会の片隅に追いやろうとする動きは, 貞淑な女たちにいっそう身を慎ませるための規制主義者による陰謀とアラン・コルバンは糾弾している (『娼婦』, 藤原書店, 1991, p.86)。
21) ジャン=ポール・アロン編,『路地裏の女性史』, 新評論社, 1984, p.57.
22) 海野弘,『酒場の文化史』, サントリー, 1983, p.130, p.160.
23) 戸塚真弓,『パリからのおいしい話』, 中央公論, 1989, p.174.
24) 山本博,『シャンパン物語』, 柴田書店, 1992, p.131, pp.234-235.
25) Zola, *Nana*, Garnier-Flammarion, 1968, p.153, 355.
26) *Un réveillon, Un Normand, Notre Cœur* 等.
27) 『シャンパン物語』, 前掲書, p.58.
28) 『ワイン物語』, 前掲書, 上巻 p.404.
29) 同書, 下巻 p.197.
30) ジャン=ポール・アロン,『食べるフランス史』, 人文書院, 1985, p.148.
31) 『シャンパン世界の酒 4』, 角川書店, 1990, p.123.
32) 山本博,『わいわいワイン』, 柴田書店, 1995, p.203.
33) « Donnez à ces messieurs ce qu'ils voudront, quant à nous, du champagne frappé, du meilleur, du champagne doux par exemple, rien autre chose. » Et l'homme étant sorti, elle annonça avec un rire excité : « Je veux me pocharder ce soir, nous allons faire une noce, une vraie noce. » (*Romans*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1987, p.256)
34) Et la pensée de l'amour, lente et envahissante, entrait en eux, enivrait peu à peu leur âme, comme le vin clair, tombé goutte à goutte en leur gorge, échauffait leur sang et troublait leur esprit. (*ibid.*, p.257)
35) Ils traversèrent une salle à manger dont la table non desservie montrait les restes du repas : des bouteilles à champagne vides, une terrine de foies gras ouverte, une carcasse de poulet et des morceaux de pain à moitié mangés. Deux assiettes posées sur le dressoir portaient des piles d'écailles d'huîtres. (*ibid.*, p.454)
36) 『楽園・味覚・理性』, 前掲書, pp.179-180.
37) 多くを語らない修道女が実は娼婦を食い物にしている様子が飲み食いする行為を通じて浮かび上がってくる。ここには, モーパッサンの宗教に対する皮肉な姿勢が現れていると言えよう。最初に思い出したいのは, 娼婦が読者に紹介される場面である。

> Petite, ronde de partout, grasse à lard, avec des doigts bouffis, étranglés aux phalanges, pareils à des chapelets de courtes saucisses, [...] (p.91)

彼女の指はひとつなぎになったソーセージに例えられる。そのイメージは, 物語を通して常に修道女が携帯している数珠につながる。さらに, 修道女達は最後の場面でにんにく入りソーセージを食べる。修道女の食べるソーセージは数珠という宗教上の用具をなぞっていると同時に娼婦の肉体をも指している。彼女達も娼婦を利用するだけ利用して見捨ててしまう。その証拠に, ソーセージが余っているのにもかかわらず, 二人は腹をすかした娼婦に恵んでやりもせず, 大事そうに紙に包んでしまいこむ。そこにはキリスト教の教えである放棄・自己犠牲の精神はなく, 利己心しか見られない。

実際のところ修道女らの利己主義は小説のかなり早い段階から見て取れる。修道女達は御夫人方に先だって娼婦の食料に手をつける。馬車の中で最も清貧に甘んじ，食欲の誘惑に抵抗力があると思われた修道女が，計算高く強欲なロワゾー夫人よりも早く食欲に屈するのは奇妙なほどである。施しをする聖職者としての徳の高さは完全に失われている。娼婦が修道女らに食料の分配をしとやかに申し出たのに対し，修道女らはろくに礼も言わず目も伏せたままで，丁重さの面でも両者の立場は本来と逆転してしまっている。

> Mais Boule de suif, d'une voix humble et douce, proposa aux bonnes sœurs de partager sa collation. Elles acceptèrent toutes les deux instantanément, et, sans lever les yeux, se mirent à manger très vite après avoir balbutié des remerciements. (p.94)

２人とも何の躊躇もなく，食物に飛びついている浅ましさが，« toutes les deux », « instantanément », « très vite » という一連の表現に窺える。

38) Goncourt, *La fille Elisa*, Hérissey, 1867, pp.57-58, 98. 『ナナ』や『娼婦エリザ』の『脂肪の塊』に対する影響関係は註5)に引用した拙論参照のこと。

39) Huysmans, *Marthe*, le Cercle du livre, 1955, p.83, 90. これは1876年に発表された作品で，ユイスマンスも「メダンの夕べ」の一員であったことやモーパッサンが『さかしま』を評価していたことから，本作品の影響を無視することはできない。